

人生を面白くする 本物の教養

出口治明 著

教養とは人生における面白いことを増やすためのツールであり、グローバル化した社会を生き抜くための最強の武器である。

本書は、「教養」をテーマにした本であるが、知識＝教養ではない立ち位置で、著者の経験をもとに一生役に立つ教養の身につけ方を述べている。

第1章 教養とは何か？

教養とは、人生におけるワクワクすることや面白いこと、楽しいことを増やすためのツールであって、人からの評価を高めたり箔をつけたりするものではない。しかし、教養を身につけるためには、ある程度の知識が必要である。

第2章 日本のリーダー層は勉強が足りない

日本のリーダー層は、世界標準からすると、教養という点ではかなりレベルが低いと言わざるをえない。日本の大学進学率は50%を超えており、先進国のなかでもそれほど低くはないのに、外国のトップリーダーと向き合うと歯が立たない。それは、私たちにはまだ知らないことが多い、世界は広いという自己認識と謙虚さが無いからだ。

第3章 出口流・知的生産の方法

自分の頭で考えるためには、どのような思考法をすればいいのか、どういう勉強をすればいいのか、物事にはいくつかのコツがある。仕事や勉強ができる人は、自分のやる気の引き出し方がうまい。やる気をうまく引き出すためには、他者を巻き込んだ仕掛けが効果的。

第4章 本を読む

仕事が忙しいときには、ゴルフ、テレビを捨てて本を読む。新しい分野を勉強するときは分厚い本から入り、もしわからない部分があるときは、読み返すことで本の内容を血肉化する。

第5章 人に会う

人との付き合い方も本と同様、面白いかで判断する。個人対個人の付き合い方が下手なのは、日本人の生真面目さの裏返し。必要のない付き合いは極力省く。様々な出会いや別れを通じて、心を許せる友だちを見つけていくことが、人につき合う醍醐味である。

第6章 旅に出る

旅こそ最高の遊びにして、教養の源。素顔の旅をしてみると、メディアを通してしか知らなかった国や地域のイメージが大きく変わる場合がある。旅の最大の効用は、「百聞は一見に如かず」にある。何よりも生きた情報は、人間の五感を通して伝わってくるもの。

第7章 教養としての時事問題（国内編）

自然発生的なハングリー精神が、あまり期待できない時代に重要な役割を担うのは教育である。教育とは、「考える力」と「生きた実践的知識」を教えるもので、人間が社会で生きていくための武器を与えるもの。

第8章 教養としての時事問題

愛国心とナショナリズムは全く別のものだと認識しておく。

第9章 英語はあなたの人生を変える

英語は度胸、恥をかいた分だけ上達する。

第10章 自分の頭で考える

「てにをは」を正しく書けない人は、筋の通った思考ができない。

自分の頭で考えることが求められている現在、教養の本当の意味が学べる本だと思う。

(幻冬舎新書, 259頁, 800円+税) (長田利彦)